

聖書には「割礼」という言葉が 120 回以上出てきますが、日本ではそのような慣習がないため、少し分かりにくい言葉なのかもしれません。

割礼という行為自体は、ユダヤ人だけではなくエジプト人やアラブ人などにもありました。幼少時に男性生殖器の包皮を切り取る儀式で、宗教的な意味合いだけではなく、衛生的な側面も持っていたようです。イエス様の時代には男子は生後八日目に割礼を受け、聖別するように、律法で定められていました。

もともと割礼は、神さまとイスラエルの民の契約のしるしとして旧約聖書の中に出てきます。創世記 17 章 9 節から 14 節で神さまはアブラハムに対して、イスラエルとの契約のしるしとして、あなたもその子孫も割礼を受けるようにと命じます。

このことから、イスラエルの民にとって「割礼」とは選ばれた民であることの象徴となっていくます。特にバビロン捕囚の際には、ユダヤ人以外の異邦人と自分たちを区別する共同体のアイデンティティとして、割礼は重要視されていきます。今でもユダヤ教において、割礼と安息日は律法の中でもとても大切にされています。

初期キリスト教においても、割礼の習慣は受け継がれていきます。しかし異邦人に宣教する中で、割礼を受けているかどうかを問題にする動きが出てきます。

それに対しパウロは、割礼に固守することはキリストから離れることであり、割礼を誇ることはキリストの十字架を無視することとします。そして人が義とされるのは割礼によるのではなく信仰によるのだと言い切ります。大切なのは割礼という律法的な慣習ではなく、イエス様を信じること、つまり心に割礼を受けることなのです。

次回は「カテキズム」です。楽しみに。



「キリストの割礼」

グイド・レーニ (1575~1642 年)

内面がユダヤ人である者こそユダヤ人であり、文字ではなく“霊”によって心に施された割礼こそ割礼なのです。その誉れは人からではなく、神から来るのです。

(ローマの信徒への手紙 2 章 29 節)

